

■ 書 評



新版 精神療法家の仕事 —面接と面接者—

成田善弘 著
金剛出版
2014年8月 264頁
本体価格 2,600円+税

本書は2003年4月より長く出版されてきた『精神療法家の仕事—面接と面接者—』に、新たな章「13章 治療者自身の心の響きを知る」といくつかのコラムを加えて新版となったものである。本書の前半は中心主題である面接について、「第1,2章 面接のはじまり」から「第7章 面接のおわり」、そして「第8章 短い面接」と続く。後半の第9章から13章では理論と経験、メンタルヘルス、ライフサイクルといったテーマで精神療法のあり方や精神療法家の課題について語られている。

本書は様々な形で大切な内容が含まれているが、何箇所かで箇条書的に示された点が1つの勘所であるように評者には感じられた。第1章において、『初回面接での治療者の仕事』として、①患者の情緒的問題の同定、②治療の枠組み、基本的ルールの設定、③治療者の有用性の伝達、④初期抵抗の処理、⑤治療契約とある。これらの中で特に治療の枠組みの設定が重視されているように思えるが、関連して『紹介状を患者の目の前で開封する』ことや、『面接において一番大切なのは「的を得た質問をすること」』と面接のポイントが記載されている。また、「第4章 治療者の介入—その1—」においては精神療法における『治療者の役割』と『患者の役割』についてまとめられている。『治療者の役割』として、①専門家として患者の依頼を受け入れる、②治療構造を設定し、維持する、③患者に傾聴し、理解する、④理解したところを患者に言葉で伝達し、患者の問題（不安、葛藤）をいま一度患者の中に差し戻す、⑤面接の中での治療者の役割をできるだけ小さくし、治療者でなくなるように努める、とある。一方で、『患者の役割』として、①自分の問題の解決を求めて専門家に助力を依頼する、②治

療構造を守る、③自分の内界を包み隠しなく言葉にする、④治療者の介入を受け入れて自分の言動の意味を理解できるように努め、自分の問題（不安、葛藤）をいま一度自分の中に引き受ける、⑤自分の問題を自分で対処できるようにし、患者（依頼者）でなくなるように努める、となっている。この①～⑤については各々が対応する関係となっており、上記の『初回面接での治療者の仕事』の各項目とも関連している。

以上、面接の大切なポイントについて著者の考えとともに、本主題にまつわる諸説についても提示されている。例えば、「第8章 短い面接」では『15分間の問診技法』という本よりBATHE法[B:Background(背景), Affect(感情), Trouble(苦悩), Handling(処理), Empathy(共感)]が紹介されていたり、「第9章 精神療法家にとっての理論と経験」で述べられている『概念装置』、『投影性同一視』、『受肉化した』理論などは精神療法の理論的な裏づけとして印象深く感じた。

新版で新たに加わった「第13章 治療者自身の心の響きを知る」においては、ケイナーの代理内省『他者の中に普遍的な自己の特徴を見出す』が紹介され、スーパービジョンにおける『治療者の気持ちを問う』というスタンスが大切であるという視点にも関連すると思われた。また最後の章ともいえる「付 私の「研究」をふり返って」では著者の強迫性障害に研究における課題点を自身で数多く指摘し、一般的な臨床心理研究（や臨床的精神医学研究）につながる課題を示している。

本書のあとがきにあるように、『本書で述べている精神療法はほかならぬその治療者とその患者との出会いの中で行われるもの』であり、近年の操作的診断に基づいたマニュアルによる治療とは対極であるとする。今年にDSM-5の日本語訳が出版され、コラムで描かれた近未来のコンピューターによる診断と治療の姿まで考えられるような昨今の風潮の中で、精神療法の原点の姿を提示しているように感じた。最後の文章に『人と人が出会うなかで心の深みを探る精神療法がこれからも生き延びることを願っている』とあるが、本書が読み継がれていくことが、著者の思いを後の世代につなげていくことになるとも思われた。

(谷井久志)